

友人の別れに想う

私も後期高齢者になりました。気分は「えーわたしが？」なんてあつかましく思い、まだまだ若いつもりでいます。

親友の夫さんが、余命 2~3 ヶ月と宣告され日々弱っていることを聞かされ、何をしてあげることが彼女にとって良いのか悩みました。時々電話をして様子を聞き、励ますことしかできません。「心配してくださる誰かがいることが励みになります。」という彼女。ストレスで下血して入院検査結果待ちの現在、飛んで東京に会いに行きたいのに、コロナ禍ではまなりません。

また、2年前大阪の親友が亡くなりました。余命 3 ヶ月と聞き 6 月、足に自信がない私は姪に付き添ってもらい、大阪の家に会いに行きました。痩せて細くなった彼女は私のために五目ずしを作って待っていてくれました。「最後の料理よ」と言ってよそってくれました。何を話し何をしたらよいのか・・・「夫さんに逢えるね。私も後から行くから先に言って待っていてね。」なんてきれいごとを言ったのです。涙涙で別れました。それから 2 ヶ月後彼女は天国に召されました、彼女はキリスト教信者なのです。最後幻覚や痛みで苦しんだので、眠ったまま息を引き取る点滴をして 3 時間後に召されたそうです。

私に最後を知らせてくれとの遺言でした。葬儀の日私は又エックに研修に行く新幹線の中、大阪近辺で手を合わせて泣くばかりでした。

大事な人が亡くなることは、どれだけ身も心も憔悴することか、未だになみだができます。生きていたときの関わりが強いほどきついですね。

